

UNSCEAR チェルノブイリ報告書（2000 年） に対するベラルーシからの批判

吉田 由布子（「チェルノブイリ被害調査・救援」女性ネットワーク）

福島第一原発事故後の人々への健康影響について、折につけチェルノブイリ原発事故による影響との比較が行われています。そして、チェルノブイリでは事故の時に被曝した子どもたちの甲状腺癌のみが国際的に認められている健康影響であるといったことが言われています。

たとえば 2011 年 12 月 22 日に出された「低線量被ばくのリスク管理に関するワーキンググループ」の報告書 (<http://www.cas.go.jp/jp/genpatsujiko/info/twg/111222a.pdf>) では、チェルノブイリ原発事故による周辺住民の健康影響は、事故後増加した子どもたちの甲状腺癌以外には、「これらの周辺住民について、他の様々な疾患の増加を指摘する現場の医師等からの観察がある。しかし、UNSCEAR や WHO、IAEA 等国際機関における合意として、子どもを含め一般住民では、白血病等他の疾患の増加は科学的に確認されていない」としています。

このときの「国際的合意」としては、「科学的知見を国連に報告している原子放射線の影響に関する国連科学委員会 (United Nations Scientific Committee on the Effects of Atomic Radiation、以下「UNSCEAR」という。)、また世界保健機関 (World Health Organization、以下「WHO」という。)、国際原子力機関 (International Atomic Energy Agency、以下「IAEA」という。) 等の報告書に準拠することが妥当である」としています。しかしこうした「国際的合意」を当のチェルノブイリ被災国の科学者や住民も納得しているわけではありません。

次ページで紹介している文書は、国連科学委員会 (UNSCEAR) が 2000 年に発表した「電離放射線の線源と影響 (SOURCES AND EFFECTS OF IONIZING RADIATION)」の付属文書 J「チェルノブイリ事故の被曝と影響 (Exposures and effects of the Chernobyl accident)」の発表に際して、その内容を批判し、国連総会での承認の延期を求めるベラルーシの放射線の専門家から国連事務総長あてに出された文書。【別紙英文もご参照ください】

このとき、ウクライナからも UNSCEAR2000 年報告に対する、抗議をこめた報告書が出されています。そのウクライナの報告書は、当時、私たち「チェルノブイリ女性ネットワーク」がウクライナ放射線臨床研究センターから直接入手したものです。追ってその内容も紹介したいと思います。

(こうした当時の状況については拙著『未来世代への「戦争」が始まっているーミナマタ・ベトナム。チェルノブイリ』(綿貫礼子との共著、岩波書店、2005年)、『放射能汚染が未来世代におよぼすものー「科学」を問い、脱原発の思想を紡ぐ』(綿貫礼子編、新評論、2012年)でも紹介していますので、関心のある方はご参照ください。)

国際連合

A/C.4/55/5

総 会

配布先：General（事務総長？）

2000 年 10 月 13 日

英文

原文：ロシア語

第 55 セッション

特別政治問題と非植民地化委員会（第四委員会）

議題 82

原子放射線の影響

2000 年 10 月 12 日付、ベラルーシ常駐代表から事務総長宛ての手紙

私はここに「第 55 回国連総会に対するベラルーシの科学者によるアピール（付属文書）」を、謹んで貴殿にお送りいたします。

貴殿がこの手紙本文と添付文書を総会議題 82 に付す文書として回覧していただけたら、幸甚に存じます。

（署名）

Sergey Ling

特命全権大使

ベラルーシ共和国国連常駐代表

2000 年 10 月 12 日付ベラルーシ国連常駐代表から事務総長宛て書簡の附属文書 第 55 回国連総会へのベラルーシ共和国科学者グループによるアピール

第 55 回国連総会での検討のために原子放射線の影響に関する国連科学委員会（UNSCEAR）より提出された 2000 年報告書の附属書 J「チェルノブイリ事故による被曝と影響」の中のチェルノブイリ事故の医学的効果を読み、その内容を知り、我々、ベラルーシ共和国の科学者グループは、原子放射線の影響に関する国連科学委員会の報告書の附属書 J の検討を後日まで延期されることを申し入れます。

私たちがこのような申し入れを行う理由は、「チェルノブイリ事故による被曝と影響」と題する報告書の附属書に提示されたベラルーシ共和国におけるチェルノブイリ事故の医学的影響に関するセクションは、情報が不完全で、必ずしも客観的とは言えず、多数の誤りが含まれているためです。

一般に、この種の報告書の重要性はいくら強調してもし過ぎることはないといえます。確かにこのような報告書は、今回の国連総会の参加者から大きな関心を持たれ、専門家や関心をもつ国際機関の活動、そして世界各国政府のガイドとしての役割を果たすでしょう。私たちは UNSCEAR の目的を十分理解し、放射線被曝と事故の医学的影響の完全かつ客観的な像を提示するための同委員会の努力を歓迎しております。しかしながらこの複雑な目標は、ベラルーシに関しては完全に達成されたとは言えません。

附属書 J「チェルノブイリ事故による被曝と影響」が、ベラルーシの科学界を完全に満足させられない主な理由は、ベラルーシで達成された重要な結果の数々が、UNSCEAR の視野からは外れているように見えたということです。これは第一に、近年得られた疫学データを含む最新の科学的研究データ、そしてチェルノブイリ事故の催奇形性及び遺伝的影響の調査結果にあてはまります。残念なことに、上述したベラルーシの科学者の研究に対する解釈に歪曲があります。

私たちは、ベラルーシの科学者がこの報告書の内容を検討できたのはかなり遅い段階であったと言わざるを得ません。2000 年 9 月 28 日にミンスクで、UNSCEAR 議長である Holm 氏と附属書 J に関しての詳細な議論を行う機会があり、そこで私たちは詳細なコメントをする機会を与えられました。Holm 氏は、ベラルーシ側が行った多数のコメントに同意しました。両者は、UNSCEAR とベラルーシ共和国との間の直接的な協力の方法を模索し、第一に、長期にわたる国際的プログラムを実施することによって、放射線量、疫学および遺伝学における不確実性を減少させ、チェルノブイリ事故に関する問題の科学的研究を継続する必要があるという理解に達しました。

私たちは、このようなハイレベルなフォーラムでこの報告書が承認されれば、チェルノブイリ事故の影響を克服しようとしているベラルーシの努力に水をさし、科学的なプログラムと国際的支援の削減に

つながるだけでなく、最終的には、今なお事故による負担と苦難を経験している何百万人もの人々の運命に悪影響を及ぼすであろうと信じるに足る根拠があります。

同時に、将来原子力事故が発生した場合、世界のコミュニティにとって、科学研究によって達成された結果およびチェルノブイリ事故の影響克服の経験をどれほど重視してもし過ぎることはないのです。

私たちは、現在の UNSCEAR 報告書の附属書 J「チェルノブイリ事故による被曝と影響」は、ベラルーシに関するチェルノブイリ事故の影響を客観的かつ十分に反映している公式文書として国連がみなすことはできないと信じています。ベラルーシ共和国の科学者や専門家は、委員会の報告書編纂を支援するために、UNSCEAR が考慮しなかった科学的データを提示し、議論する用意があります。

これに関連して私たちは、国連総会が 2000 年 UNSCEAR 報告書の附属書 J「チェルノブイリ事故による被曝と影響」に注目し、第 56 回国連総会でさらに熟慮するために附属書の作業を継続すべきであると勧告されることを強く求めます。

(署名) V. I. Ternov

ベラルーシ共和国放射線防護委員会委員長、教授

(署名) E. F. Konoplya

ベラルーシ共和国チェルノブイリ事故の影響に関する科学
的問題調整協議会会長、科学アカデミー放射線生物学研究
所所長、アカデミー会員、教授

(署名) V. A. Ostapenko

放射線医学・内分泌学臨床研究所所長、教授

(署名) Y.E.Kenigsberg

放射線医学・内分泌学臨床研究所副所長、教授

(署名) A. E. Okeanov

腫瘍学・医療放射線研究所、部長、教授